

言葉や文字だけで賄い切れない表現を追求する

書体や書風にこだわらない書道の分野「前衛書」の作品を書く榛葉さん。令和元年に開催した初めての個展が高く評価され、昨年には第33回毎日書道顕彰を受賞。書を通じた新たな自己表現の方法を、常に模索しています。

【書との出会い】
書道を本格的に習い始めたのは大人になってからという榛葉さん。きっかけは、2人の子どもの小学校入学でした。

「子どもが学校で授業を受ける間、私も自分が成長するため何か勉強したいと思うようになったんです。元々、字を書くことは好きでしたし、教室に子どもを連れて通え、家事をしながら一人でも練習することができました。習い始めた当初



「木偶」

は、字が上手く書けるようになればいいと思う程度でした」

【創作の醍醐味】

友人に誘われて、藤枝市出身の書家櫻井琴風氏の下で書道を習い始めた榛葉さん。前衛書と出会い、その世界にのめり込んでいきます。

「師匠にはよく『上手い字を



書家(雅号: 壽鶴) 榛葉壽子さん(岸町)

書くな。自分の個性がある字を書け』と言われました。書道は、古典を手本に書き写す臨書が基礎です。真似することから全ては始まりますが、そこから何を感じ、どのように表現するのか、自分の世界を築くこと

が大切なのです。文字を書き写すだけでなく、書体や技法にとらわれずに書を通じて自分の思いを自由に表現する『前衛書』の世界に魅力を感じ、創作に没頭していきました。自分の心理状態を表すには何が最

適かを考え、紙や道具を選びます。時には、ローラーや塗料を使うこともあります。前衛書は、抽象的な世界の作品の中へ自分の思いをストレートに込める、優れた自己表現のツールだと思います」

【作品が表す人生】

前衛書の世界にのめり込み50年以上。榛葉さんの作品制作は、いつもゼロからのスタートだと言います。

「作品を制作する時には、以前と同じ手法を用いないことを信条としています。成功したり評価されたりした方法を踏襲しては、同じパターンの表現しかできませんし、マンネリ化した書は、前衛書と言えません。ゼロから何かを生み出すことは苦しいけれど、この世界に身を置く限り、常に試行錯誤を重ねることは宿命ですね。人は誰しも皆、個性を持っています。それをより深く、忠実に表現できるかに心を砕きます。書道教室の生徒の作品にも、驚かされることがたくさんあるんです。寡黙でおとなしい女性が、力強く堂々とした作品を書いたりする。今年の市民文化祭で市長賞を受賞した人もいます。生徒たちが私の真似ではなく、それぞれに自分の世界を築いていることが、喜びです」

新たな世界観を追求する榛葉さんの表現への志は、このまちで裾野を広げています。



県知事に作品の説明をする榛葉さん(中央)

Shimadajin File #110

島田
Story 人